

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第169集

# 細浦 I 遺跡・細浦 II 遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# 細浦 I 遺跡・細浦 II 遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査

## 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に高速道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸縦貫自動車道建設に関連して、平成2年度に発掘調査した細浦Ⅰ遺跡、細浦Ⅱ遺跡の調査結果をまとめたものであります。両遺跡とも、山田湾に面した小起伏山地の谷地形部に立地し、調査の結果、細浦Ⅰ遺跡では、弥生・奈良時代の遺物と土坑が、細浦Ⅱ遺跡では縄文・弥生時代の遺物が発見され、新しい資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、期学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力、御援助を賜りました建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所、山田町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成4年1月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 工藤 巖

## 例 言

- 1 本報告書は、岩手県下閉伊郡山田町織笠第14地割32—22ほかに所在する細浦Ⅰ遺跡、細浦Ⅱ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、三陸縦貫自動車道(山田道路)の建設に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡台帳の遺跡番号、遺跡略号、調査面積及び調査期間は次のとおりである。

	遺跡番号	遺跡略号	調査面積	調査期間
細浦Ⅰ遺跡	MG04-0032	HUⅠ-90	3,600㎡	平成2年5月1日～6月27日
細浦Ⅱ遺跡	MG04-0042	HUⅡ-90	1,000㎡	平成2年4月11日～4月28日
- 4 発掘調査及び室内整理は鈴木貞行、藤村 隆が担当し、報告書の作成は鈴木貞行が担当した。
- 5 遺跡の基準点測量は田端測量設計株式会社に委託した。
- 6 石器の石質鑑定は、佐藤二郎氏(佐藤地質工学研究所)に依頼した。
- 7 野外調査にあたっては、山田町教育委員会及び地元の方々にご協力をいただいた。
- 8 調査に関わる諸記録、出土遺物等は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

# 目次

序

例言

## <本文>

I 調査に至る経過	1	1 検出された遺構と出土遺物	12
II 遺跡の立地と環境	2	(1) 遺構	12
1 位置	2	(2) 遺構外出土遺物	15
2 地形	2	2 まとめ	17
3 基本層序	4	V 細浦II遺跡	18
4 周辺の遺跡	5	1 調査経過と出土遺物	18
III 調査方法と室内整理	7	(1) 調査経過	18
1 野外調査	7	(2) 遺構外出土遺物	19
2 室内整理	8	2 まとめ	

IV 細浦I遺跡	12
----------	----

## <図版>

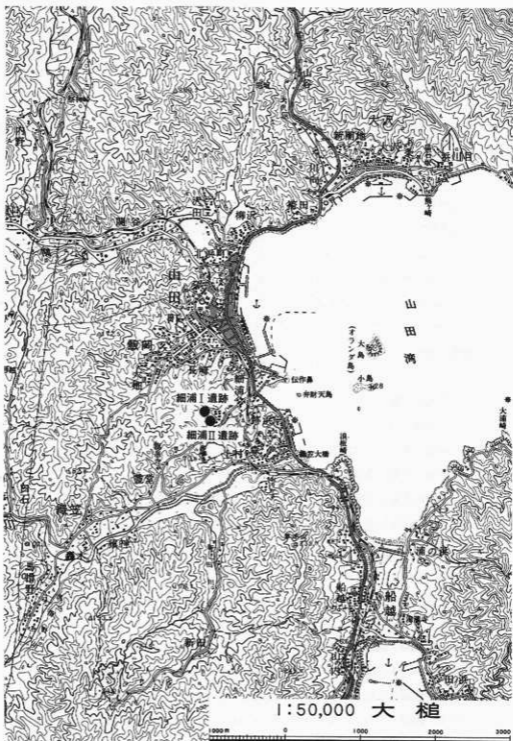
第1図 遺跡位置図		第10図 F20土坑	12
第2図 地形分類図	3	第11図 F21No.1土坑	13
第3図 細浦I遺跡土層柱状図	4	第12図 F21No.2~4土坑	13
第4図 細浦II遺跡土層柱状図	4	第13図 E21土坑	14
第5図 周辺の遺跡位置図	5	第14図 細浦I出土遺物(土器)	15
第6図 遺跡周辺地形図	9	第15図 細浦I出土遺物(石器)	16
第7図 細浦I遺跡遺構配置図	11	第16図 細浦II遺跡調査区域図	18
第8図 F19土坑	12	第17図 細浦II出土遺物(土器)	20
第9図 G19土坑	12	第18図 細浦II出土遺物(石器)	21

## <写真図版>

写真図版1 細浦I調査区全景他	25	写真図版5 細浦II遺跡遠景他	29
写真図版2 細浦I土坑(1)	26	写真図版6 細浦II土層断面他	30
写真図版3 細浦I土坑(2)	27	写真図版7 細浦II土器	31
写真図版4 細浦I土器・石器	28	写真図版8 細浦II石器	32

## <表>

表1 周辺の遺跡一覧表	6	表2 細浦I石器一覧表	16
-------------	---	-------------	----



第1図 遺跡位置図

## I 調査に至る経過

三陸縦貫自動車道は、仙台と宮古市を結ぶ延長約220kmの一般国道の自動車専用道路であり、八戸・久慈自動車道とともに、昭和62年6月に指定された全国約14,000kmの高規格幹線道路網の一部をなすものである。

大船渡・三陸道路は、大船渡市大船渡町下船渡～気仙郡三陸町越喜來の間約17,100mの事業であり、交通隘路区間の解消を目的に進めてきた事業である。また、山田道路は下閉伊郡山田町船越～関谷の間約7,800mの事業であり、現道の増大する交通需要に対応するため、一部を昭和62年度に事業化したものである。いずれも、三陸縦貫自動車道の一部として路線指定されたことにより、高規格幹線道路として工事の促進が図られている。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和63年度に分布調査と試掘調査を行い、平成元年9月5日付け「教文第415号」で事業について照会し、9月25日付け「建東陸調第111号」の回答をうけて建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所と協議を行い、発掘調査を岩手県文化振興事業団の受託事業として調整実施することとした。

これを受けて当埋蔵文化財センターは、平成2年度に大船渡道路関連の沢川遺跡、猪川館跡、細野Ⅱ遺跡、山田道路関連の湾台Ⅲ遺跡、細浦Ⅰ遺跡、細浦Ⅱ遺跡の調査を下記の契約により実施したものである。

遺跡名	契約年月日	調査期間	調査面積
沢山遺跡	平成2年6月5日	7月3日～8月3日	1,000㎡
猪川館跡	2年4月4日	4月11日～11月14日	7,500㎡
細野Ⅱ遺跡	2年4月4日	4月12日～6月8日	5,000㎡
湾台Ⅲ遺跡	2年7月31日	8月20日～10月8日	2,000㎡
細浦Ⅰ遺跡	2年4月19日	5月1日～6月28日	3,600㎡
細浦Ⅱ遺跡	2年4月4日	4月11日～4月28日	1,000㎡

## II 遺跡の立地と環境

### 1 位置

細浦Ⅰ遺跡、細浦Ⅱ遺跡の所在する山田町は岩手県の中央部東端、太平洋に面した陸中海岸の中ほどに位置し、北は宮古市、南は大槌町、西は一部を川井村・新里村と接している。直線距離で盛岡市まで約73km、宮古市まで約19km、釜石市まで約22kmである。

両遺跡は、岩手県下閉伊郡山田町織笠第14地割32—22ほかに所在し、東日本旅客鉄道山田線陸中山田駅の南方1.1km付近に位置する。これらの遺跡は本来一つの遺跡と考えられるが、中間部を削平され二分されている。

### 2 地形概観

遺跡が所在する山田町は東側に太平洋を望み、湾と岬が入り組んだ屈曲の多いリアス式海岸特有の海岸線を呈している。海岸線には霞霧ヶ岳をもつ船越半島が東に続き、山田湾、船越湾の大きな湾入が見られる。町内の大部分を占める山地は北上山地の東縁部にあたり、太平洋岸沿いに丘陵地や海岸段丘を伴っている。地形上は大部分が標高300～800mの山地で占められ、大槌町と接する北西部の高滝森(1,160m)、水谷場山(948m)、鳥古山(850m)、山母森(806m)を経て鯨山(610m)に至る尾根は高く険しい。これらの山地が海岸まで迫る地形のため、低地は河川の流域や山田湾、船越湾に面する比較的狭い範囲に限定される。

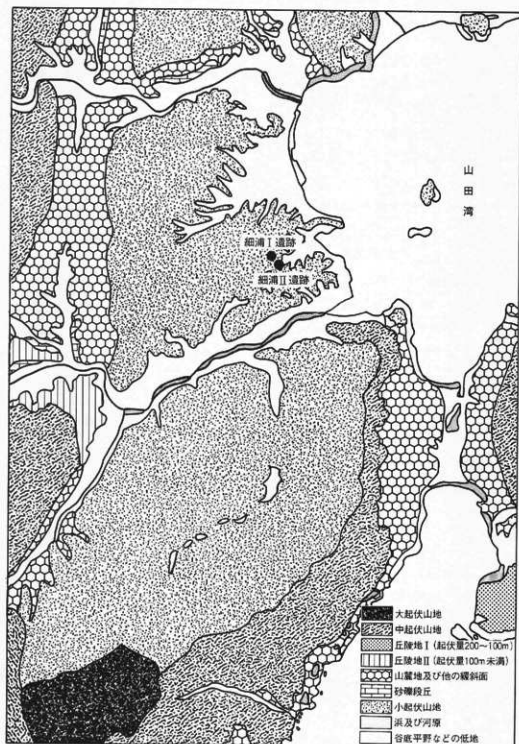
町内の主な河川は山田湾の湾奥に注ぎ込む関口川と織笠川、他に支流として馬指野川、新田川等がある。これらの川は水谷場山から鯨山に至る尾根の東側を源流部として深いV字谷を刻みながら東流を続ける。

今回調査した両遺跡は、小起伏山地から谷底平野へ続く縁部緩斜面上に立地し、東側に山田湾を望む。遺跡の周辺は土取り造成されており、山肌にはマサ化した花崗岩質岩石の面を現している。調査区の現状は細浦Ⅰ遺跡が山林、細浦Ⅱ遺跡が畑地である。

#### 〈参考・引用文献〉

- 岩手県企画開発室(1974) 『土地分類基本調査 大槌・霞霧ヶ岳』  
角川書店 (1985) 『角川日本地名大辞典・岩手県』  
山田町教育委員会(1986) 『山田町史』





第2図 地形分類図

### 3 基本層序

細浦Ⅰ、細浦Ⅱ遺跡とも、谷地形の底面にあたり、黒色土が厚く堆積している。細浦Ⅱ遺跡は、畑地として利用するために盛土が行われている。以下、遺跡別に層序の概略を述べる。

#### 細浦Ⅰ遺跡（第3図）

- I 層 黒褐色土 (10YR2/3) 表土層で木根多い。層厚15~30cm。  
 II 層 黒色土 (10YR2/1) シルト質土。しまり強い。層厚13~22cm。  
 III 層 黒色土 (10YR2/1) 上記II層と基本的に同じであるが、褐色~にふい黄褐色砂質土 帯状に30%混入。  
 IV 層 黒色土 (10YR2/1) しまり強い。層厚12~20cm。  
 V 層 暗褐色土 (10YR3/4) シルト質土。しまり強い。部分的に、にふい黄褐色土混入。層厚40~50cm。  
 VI 層 黒褐色土 (7.5YR3/1) シルト質土。しまり強い。黄褐色極小礫2%混入。層厚30~45cm。  
 VII 層 にふい黄褐色土 (10YR5/4) 砂質土。しまり強く硬い。層厚20~30cm。  
 VIII 層 黒色土 (10YR2/1) シルト質土。小粒礫 (2.5YR6/4) 3%混入。層厚33~45cm。  
 IX 層 暗褐色土 (10YR3/4) シルト質土。しまり強く硬い。層厚30~48cm。

X 層 暗褐色土 (10YR3/4) シルト質土。砂質土ブロック状30%混入。層厚15~30cm。

XI 層 褐色土 (10YR4/4) 砂質土。しまり強く硬い。

#### 細浦Ⅱ遺跡（第4図）

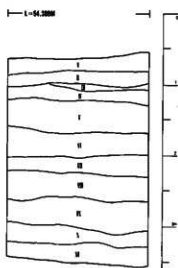
- Ia 層 黒褐色土 (10YR2/2) シルト質土。表土層。しまり弱い。層厚7~14cm。  
 Ib 層 黒褐色土 (10YR2/2) シルト質土。しまり強い。暗褐色土混入。層厚5~35cm。  
 IIa 層 黒褐色土 (7.5YR3/1) シルト質土。しまり強い。層厚12~20cm。

IIb 層 黒色土 (10YR2/1) シルト質土。しまり強い。極小粒礫2%混入 (5YR8/3淡黄色)

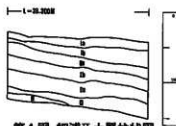
IIc 層 黒色土 (10YR2/1) シルト質土。しまりやや弱い。上層より混入礫少ない。

III 層 黒色土 (10YR2/1) シルト質土。しまり強い。IV層が混入している。

IV 層 褐色土 (10YR4/4) 砂質土。しまり強い。粒状 (極小~小) 淡黄色礫混入。



第3図 細浦Ⅰ土層柱状図



第4図 細浦Ⅱ土層柱状図

#### 4 周辺の遺跡（第5図、表1）

山田町内の遺跡は、「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」に現在約150カ所余登録されている。これらの立地状況を観察すると、縄文遺跡の多くは織笠川および支流域と山田湾に面した河岸低地・谷底平野周辺部に占地している。弥生土器も数多い場所で出土しているが、立地面は縄文遺跡と重複する。また奈良、平安時代の遺物も広い範囲で出土している。これらの遺跡のほとんどは詳細については不明な点が多いが、分布調査等の資料を基に、第5図、表1にその一部を掲載した。



第5図 周辺の遺跡位置図



### III 調査方法と室内整理

#### 1 野外調査

##### (1) グリットの設定

###### <細浦Ⅰ遺跡>

調査範囲内に平面直角座標第X系により、次の2点を設定した。

基点1  $X = -60,271.464\text{m}$   $Y = 96,196.464\text{m}$   $H = 49.880\text{m}$

基点2  $X = -60,289.142\text{m}$   $Y = 96,214.142\text{m}$   $H = 47.798\text{m}$

この2点のうち、基点2を座標原点とし、原点と基点1を結ぶ線と、原点を通りこれと直交する線を基準線とした。この原点より東西、南北とも5m毎に区切り、調査範囲をカバーするように調査区の南端から北に向かってA～H、東端から西に向かって1～33とし、グリット名はA1区・B2区等と呼称した。

###### <細浦Ⅱ遺跡>

調査範囲内に平面直角座標第X系により、次の2点を設定した。

基点1  $X = -60,425.000\text{m}$   $Y = 96,325.000\text{m}$   $H = 35.340\text{m}$

基点2  $X = -60,439.142\text{m}$   $Y = 96,339.142\text{m}$   $H = 34.154\text{m}$

この2点のうち、基点1を座標原点とし、原点と基点2を結ぶ線と、原点を通りこれと直交する線を基準線とした。この原点より東西、南北とも5m毎に区切り、調査範囲をカバーするように調査区の南端から北に向かって1～14、東端から西に向かってA～Dとし、グリット名はA1区・B2区等と呼称した。

##### (2) 粗掘・遺構検出

各遺跡とも雑物除去後、調査区域内の数カ所にトレンチを入れて土層の確認を行った。細浦Ⅰ遺跡は全ての作業を人力により進めた。細浦Ⅱ遺跡は表土除去を重機で行った。

検出した遺構の呼称は、各遺跡ともグリット名を付して呼称し、同一グリット内で重複した場合には検出した順にNoを付した。

##### (3) 精査・出土遺物の取り上げ

土坑の精査は2分法で行った。精査の各段階で図面の作成や写真撮影等必要な記録を取った。遺構外出土遺物はグリット単位で層位を記入して取り上げた。

##### (4) 実測

平面実測は簡易遺り方測量法で行った。各遺跡とも基準点を原点とする座標系を用い、グリット軸に合わせた1mメッシュを基本とした。断面形は任意の高さで作成した。実測図は20分の1を原則とし、場合によっては任意縮尺で作成した。

### (5) 写真記録

写真撮影には6×7cm版モノクロ1台、35mm版モノクロと同カラーリバーサル各1台をセットで使用した。

## 2 室内整理

### (1) 作業手順

遺構については実測図の点検、合成、トレース、図版作成の順に作業を進めた。

遺物については接合、復元、仕分、登録を行い、その後、写真撮影、実測や拓本、トレース、計測、図版作成を順に進めた。

### (2) 図版

報告書に掲載した遺構実測図の縮尺は、両遺跡とも40分の1を原則としたが、これに該当しないものは別にスケールを付した。遺物実測図および土器拓影の縮尺は、個々に縮尺率を別に付した。

遺物は各遺跡毎の遺物図版、写真図版を同一番号で統一した。

遺物実測図の表現方法は、凡例を右図に示した。



ヨコナデ



ナデ



ケズリ

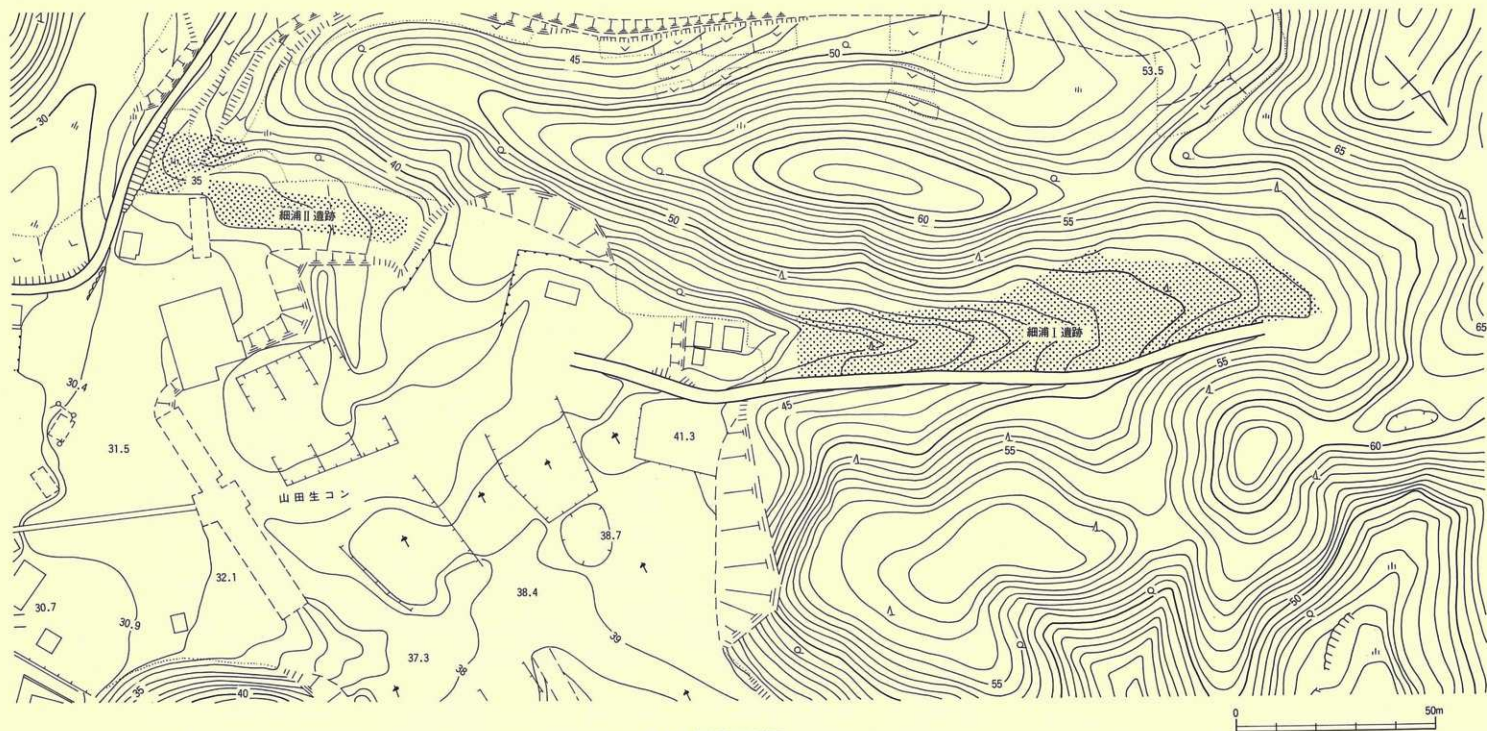


ハケメ



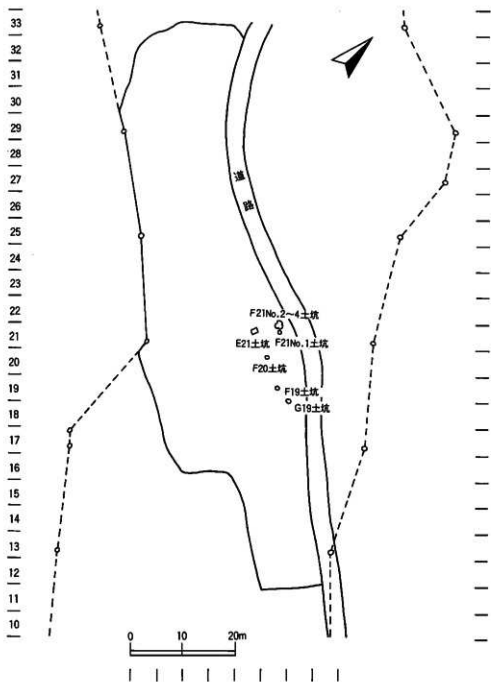
ミガキ(土師器)

凡例 調整技法の表現



第6図 遺跡周辺地形図

| A | B | C | D | E | F | G | H |



第7図 細浦I遺跡 遺構配置図



## IV 細浦 I 遺跡

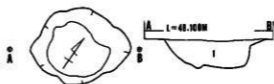
### 1 検出された遺構と出土遺物

本遺跡から検出された遺構は、土坑 8 基である。出土した遺物は、弥生土器、土師器、石器である。

#### (1) 遺構

##### F19土坑 (第8図、写真図版2)

調査区北東部のF19区に位置し、II層上面で検出された。平面形は開口部・底部ともに楕円形であり、断面図は箱型を呈する。規模は開口部106×80cm、底部で67×57cm、深さは検出面から30cmであり、壁はやや外反しながら直線的に立ち上がっている。底面は平坦である。



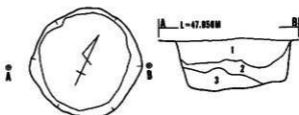
1. 10YR2/1 黒色土 しまり弱い。黄褐色土混入。

第8図 F19土坑

埋土は黒色土単層でしまりが弱い。出土遺物がなく、時期の特定はできない。

##### G19土坑 (第9図、写真図版2)

調査区北東部のG19区に位置し、F19土坑の約3m東側で検出された。平面形は開口部・底部ともに円形であり、断面形は箱型を呈する。規模は開口部直径120cm、深さは検出面から53cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。



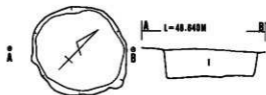
1. 10YR2/3 黒褐色土 しまり弱い。木根により擾乱多い。  
2. 10YR2/4 暗褐色土 しまり弱い。  
3. 10YR2/3 黒褐色土 しまり弱い。

第9図 G19土坑

埋土は3層に分けられ、上位から黒褐色土、暗褐色土、黒褐色土の順で全体にしまり弱くほそぼそとしている。出土遺物がなく、時期の特定はできない。

##### F20土坑 (第10図、写真図版2)

調査区北東部のF20区に位置し、E21土坑の約5m西側で検出された。平面形は開口部・底部ともに円形であり、断面形は箱型を呈する。規模は開口部直径100cm、深さ30cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がって



1. 10YR2/3 黒褐色土 しまり弱い。木根により擾乱多い。

第10図 F20土坑

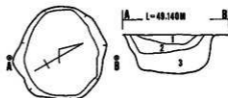
る。底面は平坦である。

埋土は黒褐色土の単層ではそぼそしている。出土遺物がなく、時期の特定ができない。

#### F21No1土坑 (第11図、写真図版3)

調査区北東部のF21区で検出された。平面形は開口部・底部ともに円形であり、断面形は皿形を呈する。規模は開口部直径98cm、深さは検出面から42cmである。底面はほぼ平坦である。

埋土は3層に分けられ、上位から黒褐色土、暗褐色土、黒褐色土の順で全体にしまり弱くぼそぼそしている。出土遺物がなく時期の特定はできない。



1. 10YR2/3 黒褐色土 しまり弱い。木根による擾乱多い。
2. 10YR3/4 暗褐色土 しまり弱い。
3. 10YR2/3 黒褐色土 しまり弱い。

第11図 F21No.1土坑

#### F21No2土坑 (第12図、写真図版3)

調査区北東部のF21区でF21No3土坑・F21No4土坑と切りあって検出された。これら3基の土坑の中央部に大きな木根があり、新旧関係を明らかにすることができなかった。平面形は開口部・底部とも楕円形と推定される。規模は開口部長軸径が102cm、深さは検出面から55cmである。底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

埋土は黒褐色土の単層である。出土遺物がなく、時期の特定はできない。

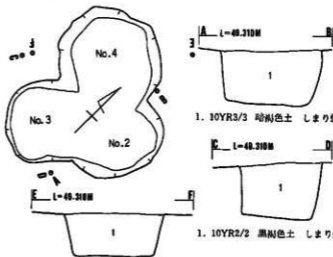
#### F21No3土坑 (第12図、写真図版3)

F21No2土坑・F21No4土坑と切りあって検出された。平面形は開口部・底部ともに円形と推定される。規模は開口部直径85cm、深さは検出面から58cmである。底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

埋土は黒褐色土の単層である。出土遺物がなく、時期の特定はできない。

#### F21No4土坑 (写真図版3)

F21No2土坑・F21No3土坑と切りあって検出された。平面形は開口部・底部ともに円形と推定される。規模は開口



1. 10YR3/3 黒褐色土 しまり弱い。

第12図 F21No.2~4土坑

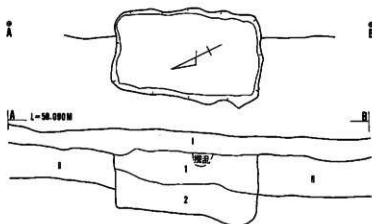
部直径110cm、深さは検出面から46cmである。底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

埋土は黒褐色土の単層である。出土遺物がなく、時期の特定はできない。

#### E21土坑（第13図、写真図版3）

F20土坑の約5cm東側でトレンチに半分かかって検出された。平面形は開口部・底部ともに長方形であり、長軸の断面形は箱型を呈する。長軸方向はN-30°-Eである。規模は開口部が157×96cm、底部で145×85cm、深さは中心部で66cmである。底面はほぼ平坦であるが、南側壁寄りやや窪んでいる。壁は垂直に立ち上がっている。

埋土は2層に分けられるが、共に黒褐色土である。下位層には炭化物が混入している。出土遺物がなく、時期の特定はできない。



1. 10YR2/3 黒褐色土 しまり弱い。
2. 10YR2/2 黒褐色土 しまり弱い。炭化物混入。

第13図 E21土坑

(2) 遺構外出土遺物 (第16・17図、写真図版4)

遺構外の出土遺物は、弥生土器、土師器、石器である。これらの総量は非常に少なく、土器類が1袋弱、石器類が5点の出土である。出土遺物の多くは、調査区中央部のI～II層に分けての出土である。

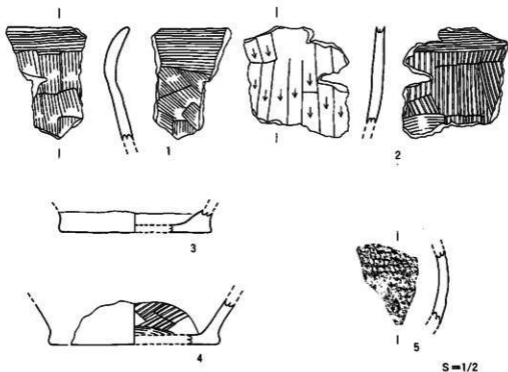
① 土器

弥生土器：弥生時代の土器は、全て接合不可能の小破片であり、磨耗も著しい。出土した8点の中から1点を掲載した。

5は壺の胴部と思われる一番大きな破片で、RLの縄文が施文されている。表面に炭化物が付着している。

土師器：土師器は、殆どが甕の小破片である。

1は甕の口縁部から胴部上半にかけての破片で、外面は口縁部横ナデ、胴部は縦方向のナデ、内面は口縁部・胴部ともナデである。2は甕の破片で、外面は縦方向のケズリ、内面はハケメ調整である。3・4は甕の底部の破片で、4の内面にはハケメ調整痕が見られる。



第14図 細浦 I 出土遺物(土器)

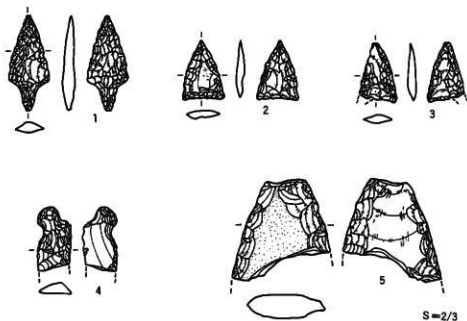
## ⑦ 石器

石器の出土は石鏃3点、石匙1点、石筥1点である。

石鏃：1は基部が突出する凸基有基鏃で、やや厚みを持つ。2・3は平基の無基鏃で、3は基部の一部を欠損している。

石匙：4は縦型石匙であるが、下部を欠損している。片面調整による直状の刃部をもつものと考えられる。

石筥：5は形状から縦長剥片を利用した、石筥の欠損品と考えられる。



第15図 細浦Ⅰ出土遺物(石器)

表2 細浦Ⅰ石器一覧表

番号	器種	出土地点	法 量				石 質	産 地
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
1	石 鏃	D20区 2層	3.8	1.6	0.4	2.0	凝灰岩	北上山地
2	石 鏃	A29区 1層	2.3	1.7	0.3	1.2	凝灰岩	北上山地
3	石 鏃	D20区 2層	2.3	1.5	0.3	0.9	凝灰岩	北上山地
4	石 匙	B24区 1層	2.5	1.3	0.4	1.8	凝灰岩	北上山地
5	石 筥	C17区 2層	3.8	3.7	1.0	15.9	凝灰岩	北上山地

## 2 まとめ

調査の結果、土坑8基が検出され、弥生土器、土師器が少量出土した。遺構と遺物について若干の考察を加えまとめとしたい。

### (1) 遺構

土坑8基の内、7基は円形ないし楕円形のもので、いずれも同規模である。埋土は単層～3層で、それぞれしまり弱い。埋土からの遺物は皆無であり、周辺からの出土も少量である。このことから所屬時期は不明であるが、埋土状況等から比較的新しい時期かと考えられる。

平面形が長方形の1基は、その形状から土壇の可能性をもつものである。しかしながらこの土坑も時期を特定できない。

### (2) 遺物

弥生土器は小破片が数点だけの出土で詳細はわからないが、文様等から後期に属するものと思われる。

土師器は環の破片が見られず、甕の破片が殆どである。時期的に平安時代の初めに属するものと思われる。

### 〈参考文献〉

- 岩手県立博物館 (1982)『岩手の土器』  
小田野哲彦 (1987)『岩手の弥生式土器編年試論』岩手県立博物館研究報告第5号  
山田町教育委員会 (1986)『山田町史』

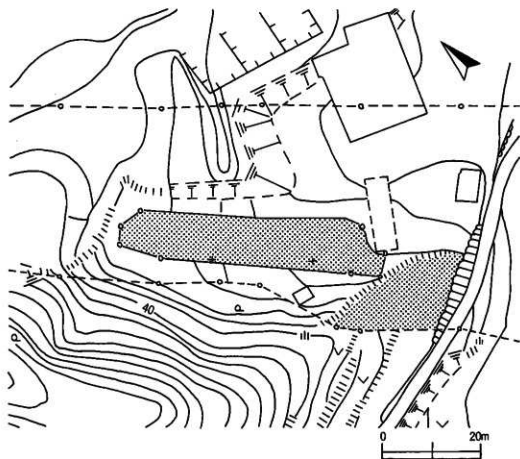
## V 細浦II遺跡

### 1 調査経過と出土遺物

#### (1) 調査経過

調査区の大部分は畑地のため雑物撤去作業に時間を要せず、試掘トレンチを設定し、手掘りにより掘り下げを開始した。遺構検出面までの深さと土層断面を観察し、実測と写真撮影を行い、その後トレンチを5か所に増やした。

粗掘と並行して順次遺構検出作業を行ったが、遺構は検出されなかった。地権者からの話によると、昭和35年頃盛土造成したとのことであった。盛土下の旧表土層も部分的に擾乱されていた。



第16図 細浦II遺跡調査区域図

(2) 出土遺物 (第17・18図、写真図版7・8)

出土遺物は縄文土器、弥生土器、石器、羽口である。総量は土器類2袋弱、石器類3点、羽口の破片2点である。

① 土器

出土量が少ないため細分類を行わず、縄文土器と弥生土器に分けた。出土層位は縄文土器、弥生土器ともIa層からIIb層にかけての出土である。

縄文土器：縄文時代の土器は破片数点の出土で同時期のものである。

1・2は深鉢胴部と考えられる小破片で、文様構成ははっきりしないが、沈線に区画された磨消縄文の文様をもつ。

3は深鉢口縁部の破片で、LR単節斜縄文を施文している。これらは、縄文時代中期後葉に属するものと思われる。

弥生土器：本遺跡で出土した土器の大部分が、弥生時代の土器である。しかし、いずれも接合不可能な小破片のため、器形や全体の文様構成が不明のものが多く、おおよそ時期的に2分できる。

4～6は高坏台部の破片で同一個体のものである。横走縄文と3本の平行沈線が巡らされている。内面と上部は磨かれている。

4は器種は不明であるが口縁部の破片で、2本の沈線が回り、口唇部にも縄文が施文されている。また、口唇部の山形上部に原体により刻みが付けられている。

8・9は交互刺突文が施文された破片である。

10は内外面に条痕文の器面調整が見られる破片である。

18は甕の口縁部から胴部にかけての破片で、無文である。内外面とも磨耗して調整痕は見られない。

19も甕の口縁部と思われる破片で、無文である。内面にはヨコナデ調整痕が見られる。

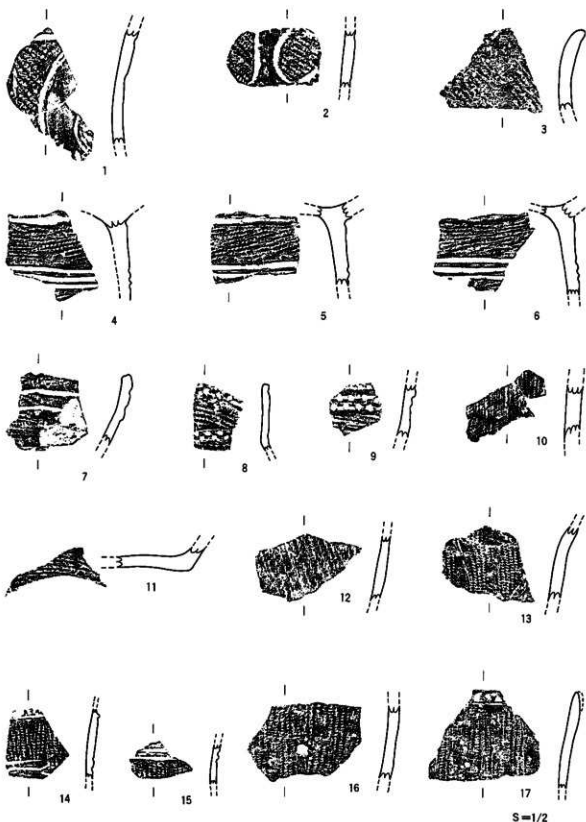
11は底部から大きく外傾する胴部を残す破片であることから、器種は鉢と推定される。外底面は磨かれ、中央部が上げ底風に盛り上がる。胴部の外面は絡糸体の横回転による撚糸文が縦走っている。

12は甕の胴部破片と思われるもので、撚糸文が施文されている。

13～16は甕か鉢の胴部と思われる破片で、いずれも原体が附加糸縄文と考えられる地文が縦走する。14・15には沈線が見られるが、文様の展開は不明である。

17は甕の口縁部から胴部にかけての破片で、口唇部は破損している。胴部には撚糸文が縦走する。





S=1/2

第17圖 細浦Ⅱ出土遺物(土器)

## ② 石器

石器の出土は石鏃1点、楔形石器1点、砥石1点である。

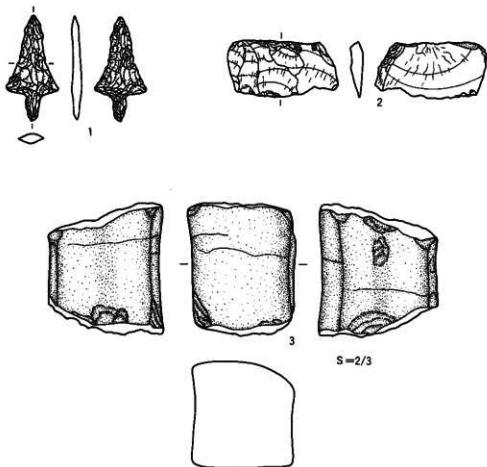
石鏃：1は平基有茎鏃である。計測値は長さ4.2cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm、重さ2.0gで、石質は珪質粘板岩である。

楔形石器：2は両極剥離痕が見られるので、楔形石器とした。計測値は長さ2.2cm、幅4.2cm、厚さ0.5cm、重さ7.1gで、石質はチャート質凝灰岩である。

砥石：3は4面に使用痕をもつ砥石の欠損品である。計測値は長さ5.3cm、幅4.2cm、厚さ4.4cm、重さ140gで、石質はアルコース砂岩である。

## ③ 羽口

羽口は2点とも小破片のため、掲載しない。



第18図 細浦Ⅱ出土遺物(石器)

## 2 まとめ

今回の調査によって得られた情報に若干の考察を加え、まとめとする。

### (1) 出土土器について

縄文土器、弥生土器ともⅠa層～Ⅱb層上面にかけての出土である。縄文土器は、文様から縄文中期後葉の大木9式に比定される。弥生土器は、小田野(1987)<sup>(注1)</sup>によるところのⅡ期とⅤ期に時期が二分できる。4～6の高坏台部はⅡ期に、他の7～17の破片はⅤ期に比定できる。ただこの中で条痕文の見られる10については不明確である。

### (2) 遺跡の性格

今回の調査では遺構が確認されなかったものの、少量であるが遺物が出土した。本遺跡の立地状況等を考えると出土した遺物は周辺部から流れ込んだ可能性が高く、調査区外に集落が形成されていることが推測される。

注1) 小田野哲恵 1987年 「岩手の弥生式土器編年試験」岩手県立博物館研究報告第5号

#### 〈参考文献〉

岩手県立博物館 (1982) 『岩手の土器』

鈴木道之助 (1991) 『図録・石器入門辞典〈縄文〉』柏書房

岩手県文化振興事業団(1989) 『夏本遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター報告書第134集

岩手県文化振興事業団(1987) 『親久保Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター報告書第116号

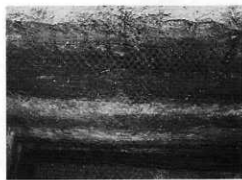
写真図版



調査区全景 (雜物除去後)



調査区全景



土層断面

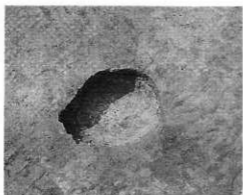


作業風景 (精査)



土坑検出状況

写真図版1 細浦I調査区全景他



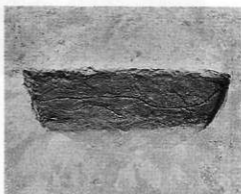
F 19土坑平面



F 19土坑断面



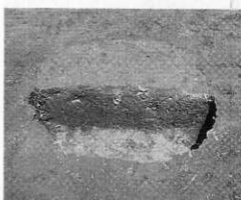
G 19土坑平面



G 19土坑断面



F 20土坑平面



F 20土坑断面

写真図版2 細浦 I 土坑(1)



F21土坑No1平面



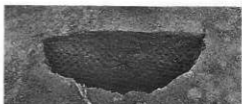
F21土坑No1断面



F21土坑No2.3.4平面



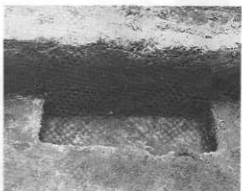
F21土坑No2断面



F21土坑No3断面

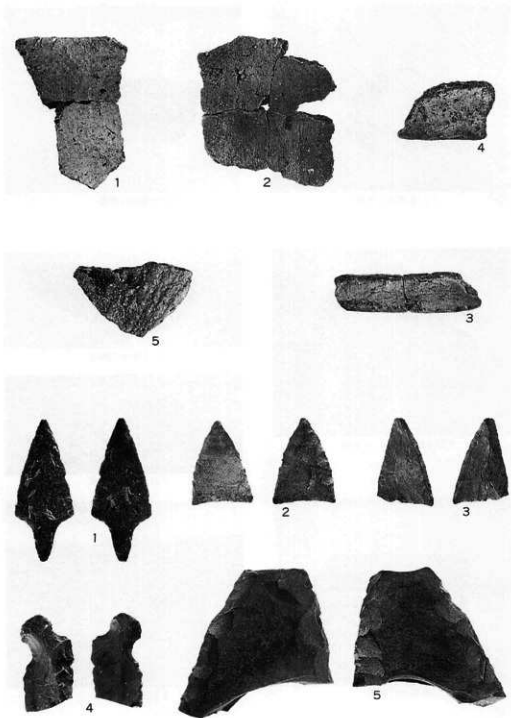


F21土坑平面



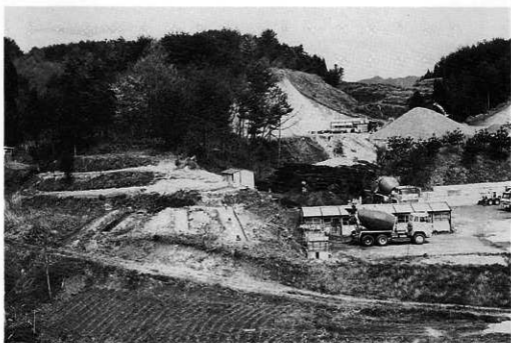
E21土坑断面

写真図版3 細浦I土坑(2)



写真図版4 細浦I土器・石器





遺跡遠景



調査区近景 (現状)

写真図版5 細浦Ⅱ遺跡遠景他



土層断面



トレンチ土層断面



作業風景

写真図版6 細浦Ⅱ土層断面他



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17

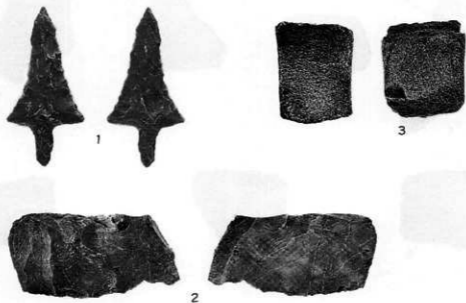


18



19

写真図版7 細浦Ⅱ土器



写真図版8 細浦Ⅱ石器

## 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼 所長	小笠原 喜 一		
副所長	高橋 敬 明		
[管理課]			
管理課長(兼)	高橋 敬 明	嘱 託	吉 田 一 男
課長補佐	森 岡 陽 一	"	根 橋 文 一
主 事	佐 藤 理	運 転 技 士 兼 技 能 員	佐 藤 春 男
[調査課]		文 化 財 専 門 調 査 員	佐々木 信 一
調査課長	村 上 康 昭	"	小 原 眞 一
課長補佐 (第一班)	佐々木 嘉 直	"	村 上 修 孝
課長補佐 (第二班)	鈴木 恵 治	"	酒 井 宗 達
主任文化財 専門調査員	小田野 哲 憲	"	松 本 平 克
"	三 浦 謙 一	"	花 坂 政 博
"	工 藤 利 幸	"	佐々木 務 彦
"	高橋 典右衛門	"	金 子 昭 彦
"	平 井 進 紀	"	濱 田 精 宏
"	中 川 重 敏	"	鎌 田 勝 則
"	藤 村 敏 男	期 限 付 専 門 調 査 員	阿 部 邦 彦
文化財 専門調査員	高橋 義 介	"	星 雅 之
"	斎 藤 實 隆	"	引 屋 敷 学
"	佐 瀬 孝 雄	"	鈴 木 知 己
"	千 葉 博 司	"	藤 村 隆 悟
"	斎 藤 博 幹	"	千 葉 博 由
"	東 海 林 隆 幹	"	熊 谷 信 一
"	佐々木 弘 均	"	新 山 口 博 英
"	川 村 貞 行	"	川 村 博 聡
"	鈴木 東 格	"	八 重 座 のり子
"	伊 藤 修 雄	"	
"	遠 藤 邦 雄	"	
"	齋 藤 敏 明	"	
[資料課]			
資料課長	村 松 義 夫		
主任文化財 専門調査員	田 鎖 秀 夫		

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第169集

ほそら  
細浦 I 遺跡・ほそら  
細浦 II 遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査

印刷 平成 4 年 3 月 25 日

発行 平成 4 年 3 月 30 日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020 岩手県紫波郡南村大字下坂岡11地割字高屋敷185  
電話(0196)38-9001・9002

印刷 株式会社 熊谷印刷  
〒020 岩手県盛岡市上田一丁目 6-49  
電話(0196)53-4151

---

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1992